

# 精神医療の世界でも……イタコアで

## ●「おかみさんも大変だねえ」

一九七〇年の寒い冬の朝のことです。

私は夫とタクシーに乗って、東京郊外のある精神病院に向かっていました。夫は酔つて正体なく眠りこけています。車の中には、アルコールの臭いと胃からもじした『小間物類』のすえた臭いが充満していました。

「ごめんなさいね」とあやまる私に、運転手さんは言いました。

「あとで洗つから心配しなくていいよ。それより、こんなアル中の亭主を持つちまつて、おかみさんも、大変だねえ」

運転手さんのこの言葉を聞いて、私はひじく気がとがめました。

実は、夫はアル中でも何でもないでした。アル中患者に化けて、これから精神病院に潜入しようとしていたのです。病院の生の姿を、世間に知らせるためです。

この病気の人は「おれは酒は好きだが、絶対、アル中なんかじやあない」とかたく信じているのが特徴で



日本では今も鉄格子と鍵が残されています。これは東京のはずれにある精神病院の老人病棟の風景

す。ひとりで精神病院を訪ねていき、「僕、アル中です。入院したいんです」なんて言つたら、すぐに怪しまれてしまいます。

そこで、芝居心があり、しかも「アル中の友達」という役柄びつたりの風貌を持つ社会部の先輩、佐藤国雄記者に応援を求めました。私は洗い髪を輪ゴムでまとめ、流行遅れの服をまとつて、疲れはてた妻という装いをしました。タクシーを呼び、付き添いました。幸先よく(?)、ますタクシーの運転手さんが夫を「本物」と思い込んでくださつた、というわけなのです。

そのあとは、すべてがすらすらと運びました。院長が「こりやー飲んでる。入院だ、入院だ」と診断し、屈強な男の人が出てきて夫の腕をつかみ、鉄格子の向こうへ。追いかけようとした私に、病院の職員は叫びました。「ここから先は、家族の方はご遠慮ください!」

この病院は、慶大出身の精神科医が院長、東大出身の高名な精神科医が顧問をつとめ、格式ある看護学校の実習病院でもありました。決して「一部の悪徳病院」ではありません。

けれどそこは、一言いえば「人間捨場」でした。「作業療法」という名の内職や使役、搾取。おどしに使われる電気ショック。凍えそうな雑居部屋と粗末な食事。貧しい治療内容。いつ鉄格子の病棟から出られるか教え

てくれない不安……。(詳しくは朝日新聞社刊・太熊一夫著『ルボ・精神病棟』を)

### ●精神病院が廃墟になつたノ

夫が精神病院に潜入したその翌年の七一年、イタリアでは、ヴェネツィアの東、ユーコスラビア国境に近い港湾都市トリエステで、精神病の人々を町の中で支える試みが始まりました。

トリエステ県には、当時、サンジョバンニという名の由緒ある県立精神病院がありました。日本でいう松沢病院のような存在です。一九世紀末に建てられたオーストリア風大庭園付きの豪華なもので、そこには、当時、鉄格子の中に一一五〇人の人々が閉じ込められていきました。

この巨大精神病院の院長に、四七歳の精神科医、フランコ・バサッリアが迎えられ、彼はたちにこの病院の改革に着手したのです。

\*

八九年の暮れ、私は初めて、そのトリエステを訪ねました。

この一〇年の間に、日本では、精神病院の入院患者が二四万から三五万に増えています。人口比でみれば、世界でも稀なほど多い入院患者の数です。しかもその七割ほどが鍵の中に閉じ込められています。日本にだけ悪性の精神病が流行しているはずもないのに、これは、どう考へても妙な話です。

日本がこのありさまだといふに、私の訪れたトリエステ県では、「精神病院」そのものがなくなつてしましました。往時の建物は残つているのですが、病棟は廃墟になつたり、工業高校に転用されたり、イベントホールや美容院や軽食喫茶や八百屋に改造されたりしていました。最後の病棟が十年前に閉鎖されました。

患者さんは今、町の中に住み、町の中で働き、町の中で余暇を楽しんでいました。

つまり、ノーマリゼーションの思想が、この町では精神保健の世界に根を下ろしていたのでした。

デンマークのバンク＝ニッケルセン氏は、どんなにハンディキャップを負つた人も、ふつうの住まい、リズムのある日々、ふつうの余暇が持てるよう条件を整えることが「ノーマリゼーション」だと言っています。

イタリア・トリエステの精神科医は、ノーマリゼーションという言葉を使つてはいません。トリエステの改革のルーツは、戦後の英國の精神医療改革なのだと思います。けれど、トリエステで行なわれた改革は、まさにノーマリゼーションそのものでした。

### ●精神病の人々を町の中で支える

医師や看護士、看護婦は、病院ではなく精神保健センターを拠点にして患者さんを支えていました。センターといつても、日本のそれとはすいぶん趣が違います。アパートの一角を借りたり、大きめの住宅を改装したりしたもので、それらは、ごくさりげなく町にとけこんでいます。

人口約二七万のトリエステに精神保健センターが七カ所ありました。つまり、住民四万人に一カ所、日本でいう中学校区に一つという感じです。

センターは、クリニックであると同時に、憩いの場やレストランを兼ねています。どのセンターもにぎわっていました。危機状態の患者さんを泊



街中のレストランもコーベラティーババの一つ。右の男性は精神科医  
兼マスターでウテンテの様子に氣を配ります(相内不二雄撮影)

めるベッドも、一つのセンターに八つずつ用意されました。

真鍮の小さな表札が出ているだけなのに、センターは住民によく知られています。

家族や知り合いに精神病の兆候があらわれると、人々はセンターに気軽に相談にやつてきます。精神の状態に不安を感じている人も、自ら進んでやつてきます。人里離れた鉄格子の中に閉じ込められる心配がないからでしょう。七つのセンターに出入りする人は年間二九七四人、県民一〇〇人に一人の割合です。

患者さんは町中のふつつの家に住んでいました。アパートを借りる人、「カサ・ファミリア」で暮らす人、旧精神病院の豪華な院長公邸に住む高齢の元入院者たち……。「カサ・ファミリア」は日本といえば共同住居、生活寮、グループホームといつたところ。身寄りのない患者さんが数人ずつグループを組んでアパートに住んでおり、そこに、センターから看護婦や看護士が毎日やつてきて面倒をみているのです。

### ●「精神科医はボルノの監督だった」

昔、病院で行なわれていた「作業療法」は廃止されました。そのかわりに、ソーシャルワーカーが中心になつて、「本物の仕事」を見つけたり開発したりする努力が続けられていきました。レストランの調理助手や給仕、印刷、製本、庭師、農業、鞆作り、家具作り、ディスコの職員など、その職種は二〇種類におよびます。それらが集まつて「コペラティーヴア」(就業協同組合)をつくつており、年商四億円もあげています。一人前の報酬を得ることのできない人には公費で奨励金が出されました。

「レクリエーション療法」もなくなりました。そのかわりに、「本物のレクリエーション活動」が行なわれていました。その拠点は、旧病院の病棟などを改装してつくつた「ラボラトリオ」(工房)でした。絵画、音楽、演劇、陶芸……。指南役は、本職の絵描き、音楽家でした。

患者さんは、この町では「ウテンテ」(利用者)と呼ばれます。センターや協同組合や工房の利用者という意味です。専門家はここでは白衣ではなく私服。ウテンテとは愛称で呼びあいます。髪をたくわえた大男の精神保健センター長シユゼッベ・テ・ラツクア医師はペッペと呼ばれていました。そのテ・ラツクア医師が言いました。

「精神科医はこれまで、ボルノの監督みたいなものでした。ボルノの監督は人間という存在のこく一部だけに関心を示します。精神科医もこれまで人間のこく一部にすぎない症状にだけこだわり、それを消そう、無くそつとしてきました。でも視点を変えれば、同じ人物が違つて見えてくるものです。『いい父であり、人を愛し、絵をかくのが好きなフランコ』といつように。そうした健康な部分を広げていくのが我々のやり方です」

患者を町に出したら危険だ、そんな「常識」の予想に反し、司法精神病院送りも強制入院もここでは激減しています。

最高責任者のフランコ・ロテッリ医師は、一九九〇年一月、来日し、日本の行政官と医師に、こう呼びかけました。

「医師が患者を閉じ込めれば、『彼らはきっと怖い人々なのだ』と市民は思う。医師が患者とともに町で暮らす方式を実践すれば、それが市民の常識になる。市民の排除の気持ちは行政官や医師の考え方の反映なのです」

美容院に改装された元病室「ウテンテ」だけではなく町の人々もやっています。美容師さんもウテンテ(相模原市北二郷撮影)



# 寝たきり老人のいる国いない国

「寝たきり老人」のいる国ない国

朝日新聞

第一章 「寝たきり老人」がない!

おむつをしていてもお洒落ができる●木  
ムヘルパーが朝晩、現われる→●アマチュ  
アビプロの違うところは●魔法のランプを  
こすったときのように●訪問看護婦は名探  
偵●家庭医といふ名の専門医●補助器具セ  
ンターは地下室がすごい●「〇〇床」と「〇〇  
室」●在宅福祉三点セット  
対話① アンデルセンと社会人伝

第二章 ノーアコセーリングの波

「ふつうに」いう思想●まず、知的ハンデ  
イの世界で●教育の世界にも●精神医療の  
世界でも●人生の最後に●保護で慈善で  
もなく●障害者が障害者でなくなるとき  
対話② バンク・ミケルセン氏

第三章 真の豊かさを実現するために  
日本のですじ男たち・女たち●「法律破りを  
どうぞ」という制度●権限は市民のそばに●  
寄付とボランティアと民活と●税金は「預け  
るもの」「取られるもの」?●人間のことを  
見るか?●社会もしくらし●動物の世界に  
はないもの

対話③ 闘沢憲美教授

定価(本体一四五六円+税)  
ISBN4-89240-095-5

朝日新聞論説委員

大熊由紀子

ぶどう社



なぜ  
「寝たきり」  
「ない」の?  
? なぜ

その謎をさぐる旅は  
お年寄りのことから  
障害をもつた人々のことへ  
そして政治や文化  
民主主義の問題へと  
ひろがっていった  
あなたがくシャープな  
女性ジャーナリストの  
眼がとらえた  
「真の豊かさ」とは

熱い想いを  
こめた  
書き下ろし!